

## Zoom書いっ会 土手の春

首藤 静夫

四月中旬。桜は八重を残すのみだ。花疲れのこの時期、近くの多摩川土手を歩いた。田園都市線の二子橋から東横線の丸子橋に至る下流域が普段のコースだ。

土手道は季節ごとに顔を変える。夏や秋には虫たちが草の中に宿り、冬はやや蕭条、四月の今は一番のどかな景色だ。

土手に上がった途端、黄色い花の絨毯が目飛び込む。菜の花、と今まで漠然と思っていたが、グーグルレンズで調べるとセイヨウカラシナとある。確かに花の付き方が菜の花よりばらけており、茎は細く、赤みがかっている。それにしても黄花の広がりが見事なことよ。

しばらく進むと、ノダイコ（野大根）の群落である。白い花びらの中に赤紫をほんのりあしらっている。万葉の昔からスズシロと呼ばれ、春の七草の一つである。清楚な花の感じはスズシロの名前がぴったり。古代人の言葉のセンスの素晴らしいこと。

ノダイコの名前は『坊ちゃん』にも登場する。教頭・赤シャツの腰巾着で、どこでも、なんでも教頭におべっかを使ういやな奴だ。たいこ持ち（幫間）からきたネーミングだろうが、これではスズシロが可哀想だ。

カラシナの黄色、ノダイコの白に肩を並べるようにギシギシが伸び、

濃緑の葉を広げている。この草は、昨年九州会員のKさんから教わって覚えたばかりだ。葉は細長く、波打っており、茎は直立。丸っこい小花を無数につけている。スイバと似ており、いまだに区別がつかないが、たいていはこのギシギシだとか。俳句の材料になりそうもないが繁殖力旺盛な植物である。

背の低いところではオオバコ、スギナ（ツクシ）、カラスノエンドウなどが目立つ。去年は沢山咲いていたオオイヌノフグリがほとんど見えない。ちよつとした時期ずれなのだろう。

昭和天皇は、雑草という草はありませんと仰ったそうであるが、名も知らぬ草が小さな花をつけて存在を主張している。その近くをジョギングランナーが二人、一人、低い草たちを踏みながら走りすぎっていた。